

一〇〇歳の短歌 田中拓也

「心の花」会員である千葉県在住の石井千恵子氏が昨年十一月で満一〇一歳を迎えられた。石井氏は一九一五年（大正四年）に千葉県印旛郡千代田村（現四街道市）で生まれ、千葉県女子師範学校（現千葉大学）卒業後は長く小学校に勤務し、現在は千葉県八街市で暮らされている。一九一五年はまさに第一次世界大戦の最中である。国内では大正天皇の即位の礼がとりおこなわれ、芥川龍之介の「羅生門」が雑誌「帝國文学」に発表されたのが同年十一月の出来事であった。

・デイ・サービス二年経ぬれば一日の流れに乗れり人は人なり

「心の花」二〇一七年一月号

・あの夢の続きやいかに同窓会渡辺^{なぐ}さん正子さんとしえちやん

同二月号

・里山の黄葉のきはみ見ぬうちに風のさらひて青空を見す

同三月号

・年毎に年賀状の束軽くなり時の流れ身にしむ百一歳

同四月号

二〇一七年にはいつてからの「心の花」誌上の作品を抄出した。まずは、一〇一歳を迎えても欠詠なく作品を発表する力に圧倒される。「デイ・サービス」に慣れてきたことの感慨を詠んだ一首目。

「あの夢」を詠んだ二首目は同窓生と再会する夢だったのだろう。この世を去った仲間達への想いがせつない。「里山」の自然を詠んだ三首目、「百一歳」になった感慨を詠んだ四首目もごく自然体で日常生活を丁寧^{ていねい}に詠んでいるのが特徴である。手元の「歌人手帖二〇一七年」（ながらみ書房）の歌人名簿には約一四〇〇名の歌人が掲載されているが、その中で大正生まれは約六〇名。（大正一桁世代は僅かである。）もちろん、「歌人手帖」などに掲載されていない方もたくさんいるので、実際には一〇〇歳を超えた歌人はもっと多いと思うが、おそらく現時点では明治生まれの歌人はほとんどいなくなり、大正一桁世代が最高齢の歌人の「グループ」といえるだろう。

・様々の花咲きさかる庭の面歌ごころ誘ふ一樹あれこそ

「短歌研究」二〇一六年一月号

・一斉に流れに漂ふユリカメ隅田の川の常景として

「角川短歌」二〇一六年五月号

・もう一冊買ひて帰らむ文庫本思ひて書架をめぐりしつ

「歌壇」二〇一六年六月号

今年の三月に亡くなられた清水房雄氏が総合誌に発表した作品から抄出した。最晩年も旺盛な作歌を続けられた清水氏は石井氏と同年に千葉県に生まれ、ともに教員であったという共通項を持っている。二人の作品を読んでいると、「一〇〇歳」という年齢が特別なものではなく、ひとつらなりの人生のひとつときであることが垣間見えてくる。超高齢化社会を迎えつつある現代社会において、一〇〇歳を超えた歌人たちの作品は光彩を放つのではないだろうか。次号の「心の花」の石井氏の作品も楽しみにしている。